

# 畏友・上田研二氏

高齢社というのは、高齢者就業支援を主務とする株式会社社の社名である。創業者は畏友、上田研二氏。愛媛県の高校を卒業後、東京ガスのメーター検針員として就職、その後、赤字に苦しむ関連会社二社の経営再建を担わされ、これに成功。その頃、六〇歳の定年を前にして念願の高齢社の設立にいたった。平成十二年、資本金一〇〇〇万円、役員・社員二八名のスタートだった。

当時の日本企業の定年は六〇歳。少子高齢化の時代にすでに踏み込みつつあり、高齢者就業についての議論がはじめてもいた。しかし、実際にこれをビジネス化する人はいなかった。高齢社の設立は、振り返れば画期的だった。入社資格は六〇歳以上、七〇歳未満（現在は七五歳未満）、業務のあるときのみ勤務という不規則勤務形態、出来高払い、賞与・退職金なし、だった。東京ガスの検針員として出発したことが縁となり、また東京ガスとしても検針作業を外注したいという希望もあり、同社の定年退職者を雇用してこの事業を始めた。

わたなべ としお  
渡辺利夫

（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十二月、退任）。二〇一七年六月より現職。

雇用される者のメリットは大きい。『毎日が日曜日の社員である。不規則勤務、出来高払いのほうが働きやすかった。すでに検針経験を十分積んでいたために、人材育成のための資金と時間は不要、発注側も安心して仕事を任せることができた。』

高齢者就業をどうするか、このテーマが大きな社会問題となり、上田研二氏のつくった高齢者就業モデルをベースに次々と同業の組織が各地方、各業界に生まれた。上田氏は「カンブリア宮殿」「ガイアの夜明け」といったテレビ番組などにも出演して、さらに大きな反響を呼ぶことになった。

上田研二氏、高齢社を立ち上げた頃にパーキンソン病を発症、この進行性の病いと二十年以上も折り合いをつけながら仕事をつづけ、ついに刀折れ矢尽きて過日亡くなった。天性の「人たらし」である。「過去から現在を見たときの〈今〉は、自分にとって一番年を取ったときであるが、現在から未来を見据えたときの〈今〉は、自分にとって一番若いとき」だ。上田氏の座右の銘である。